

【書評】

爆撃はジェノサイドだ

— 爆撃の歴史から見た大量虐殺の構造

キム・テウ
金泰佑『爆撃：米空軍の空爆記録で読む朝鮮戦争』

カン・ソンヒョン
康誠賢

翻訳：永谷ゆき子

1. 爆撃の強烈な記憶がある。イラク戦争開戦と始まった米空軍の圧倒的威力の爆撃。その強烈さは単に「大量」だからでなく、CNNなどで可視化された「超精密」兵器システムのイメージからただだろう。当時放送で目にした戦争は血と肉の弾ける残酷さではなく、最先端の科学技術が用いられた兵器体系が運用されているスマートな光景だった。ところがその光景の死角は何だったのか？ 程なくアルジャジーラ放送が、その死角を視覚化した。精密爆撃の結果破壊されたのは、市場と民間人だった。特に頭が半分ふっ飛んだ、イラクの少年の悲惨な姿をクローズアップしたシーンは今でも忘れられない。当時、米国はこれを「付随的損害 (collateral damage)」と規定した。この用語は、「正当な軍事目標ではなく、人や物に対して、非意図的あるいは偶発的に負わせた傷害や損害」を意味する軍事的用語であった。

『爆撃』の著者金泰佑が本の冒頭で「付随的殺人」という動画に言及したとき、その記憶がオーバーラップした。米軍アパッチヘリコプターのパイロットがバグダッド近くの小都市の日常を生きる民間人たちに向かって無差別機銃掃射をした後、その場面を見て冗談を言って笑う姿、これについて「ただ平凡で日常的な任務であったに違いない」（金泰佑、2013：16頁）と強調する著者。これを注意深く考えれば、次のような疑問が湧く。パイロットの行動は決して平凡で日常的ではない衝撃的な姿である。では、なぜ著者はそう言ったのか？ そして何よりも、この動画のタイトルはなぜ「付随的殺人」なのか？

「付随的」、すなわち意図的ではなかったことを強調するのは、パイロットが民間人を武装した敵と誤認したという仮定が前提されたものである。しかし動画を見れば分かるが、それはパイロットの誤認ではなく、一方的見方であった。なぜそのような状況が発生するのか？ これは明らかに、著者が先にパイロットの「ただ平凡で日常的な任務」と言ったことと関連がある。

著者は、このような米軍のパイロットたちの行為を根源的に理解するために百年にわたる人類の空爆の歴史を振り返って見る。彼の表現を借りれば、「飛行に成功するや否や空から地上を爆撃する自滅的夢にひたることになった歴史」（20頁）を検討している。これにより、両大戦間の軍事政策で採られた大量爆撃は、パイロット個人の（善/悪）性向を超える構造的次元で分析されるべきだということを強く示唆している。

著者が10年以上精進して分析した朝鮮戦争期米空軍の空爆の実体は、そのような次元で

評価に値する。その「実体」とは、彼が途方もない高さに積み上げた資料の山をよく分析し構成した実証的事実を意味するだけではない。その事実の中からすくい上げられた大量の「爆撃の構造」の実体が本の中から姿を現わす。そして彼はこのような爆撃の構造限界を分析しながら、たとえ戦術的な精密爆撃が追求されたとしても、爆撃は構造的に大量虐殺を胚胎するほかないことを見せてくれた。この時点で、爆撃の理論的省察は軍事的爆撃理論を越えてジェノサイド理論¹⁾、さらに暴力論の地平と出会うことになる。

2. 本書第1章の爆撃の歴史は、「概観」という副題がついている。著者は第1、第2次大戦の爆撃の歴史を概括的に検討するという意図でこの題を付けている。同時にこの章は、おそらく彼は意図していないだろうが、本全体を読み進んでいく重要な枠組みを提供するという点で、概観と言える。私が思うにはこの章は「爆撃の類型化」を内包している。これは本の中で提示された、圧倒的に多くの事実の中に埋没しないまま、次に、その次に移ることができるよう支援する一種の羅針盤の役割をする。

著者は、空軍理論の創始者たちを検討しながら、戦術爆撃と戦略爆撃、精密爆撃と地域爆撃という概念を抽出する。戦術爆撃は制空権掌握を介して地上・海上部隊の作戦・戦闘を支援するために実施される空爆を言うが、戦略爆撃は、敵の戦争遂行能力と意志を破壊するために敵の主要都市、生産設備、電力・交通・通信設備、政治・軍事の中枢部を破壊する空爆を意味する(28頁)。また、精密爆撃は主要な軍事・産業施設への制限された空爆を実施することを意味する一方、地域爆撃(または目標区域爆撃)は、軍事用途の施設や周辺の民間住宅地区など市街地全体を一つにまとめて軍事目標とみなして無差別爆撃することを言う(29頁、35頁)。この概念を活用すれば、以下の表を作成できる。

<表1>爆撃の類型化

		戦略爆撃			
精 密 爆 撃	戦略 - 精密爆撃	戦略 - 地域爆撃		地 域 爆 撃	
	戦術 - 精密爆撃	戦術 - 地域爆撃			
		戦術爆撃			

¹⁾ ジェノサイドは通常「集団殺害」、「大量虐殺」の意味で使用されるが、本来はそうした物理的な破壊だけを指すのではなく、集団の生活基盤と社会形態に対する社会的破壊を含む。つまり、物理的大量虐殺はジェノサイドのサブカテゴリに対応する。が、国連ジェノサイド条約が形成される過程でこのような脈絡は削除されてジェノサイドは意図性を持った集団殺害に縮小された。カン・ソンヒョン、「ジェノサイドと韓国現代史：ジェノサイドの定義と適用を中心に」(『歴史研究』18(2010);歴史研究所編『韓国民衆史の新しい模索と歴史を書くこと』(ソウル：先人、2010、pp.225~227)。

第二次大戦は、戦略爆撃としての地域爆撃が無差別的に実施された戦争であった。そして作戦 - 地域爆撃理論の創始者たちが意図したように、爆撃の主な対象は、後方の敵国民、すなわち（非武装）民間人であった。1940年代イギリス、ドイツ、日本などの主要都市での戦略 - 地域爆撃で膨大な量の焼夷弾が大量投下され、その火の海の中で民間人、その中でも女性、子供、高齢者の多数が虐殺された。特にハンブルク（1943.7.27）、ドレスデン（1945.2.13）、東京爆撃（1945.3.9）で、わずか一晚の間に死亡した民間人は、それぞれ約5万人、3万5千人、10万人だった。

この大量爆撃は一般の法律 - 倫理感覚で見たときに非人間的な犯罪であり、組織的な戦争犯罪であった。しかし、同時に、この爆撃による大量虐殺は、マーク・セルデンの表現を借りれば、「忘れられた大虐殺（Forgotten Holocaust）」になった。連合国が枢軸国の大量爆撃を戦争犯罪や人道に対する罪として問題にするようになると、それは連合国にもブーメランのように戻ってくることを懸念したためだったのだ。結局、ナチスドイツのホロコーストだけが唯一無二の（unique）大虐殺として断罪された。結果的にこれは、モダニティと文明 - 暴力の関係を真剣に省察することができる土台の半分を、人類自ら打ち壊す形になった。もちろん残りの半分の土台が戦後の戦争犯罪、人道に対する罪、ジェノサイド犯罪に対する国際法的基準、世界人権宣言、市民の保護に関するジュネーブ協定などの一連の制度的装置を設けるように省察的に作用したが、これは当時新たに展開している国際政治の現実から見れば非常に脆弱なものであった。

3. 冷戦の形成と朝鮮戦争の勃発はその懸念を現実化させた。著者がよく示しているように、朝鮮戦争中ずっと、朝鮮半島全域に米空軍の空爆が続いた。そして、その被害はそっくりそのまま南北の民間人が耐えなければならなかった。空爆と関連した正確な人的被害の統計はないが、北朝鮮地域の民間人だけで少なくとも28万2千人が死亡したことが確認されており（385頁）、韓国の場合、全体集計はないが、かなりの規模であると推定されている。²⁾

朝鮮戦争期の空爆が特徴的なのは、戦略 - 地域爆撃だけでなく、戦術 - 地域爆撃概念の無差別爆撃が登場したという点である。開戦以来、国連軍は地上戦で急激に劣勢になるとB-29重爆撃機を動員し、地上軍近接支援作戦を行った。98機のB-29を動員して横5.6km×縦12kmの長方形型区域に無差別爆撃した^{倭館}の「絨毯爆撃」（1950.8.16）が代表的な事例だ（231～233頁）。その結果は、国連軍自ら認め、北朝鮮軍が嘲笑したように、軍事的には完全に「誤爆」であった。代わりに、その地域にあった二つの村は跡形なく消え、近くにいた避難民たちも火の海に包まれたまま消えて行った。味方の地上支援作戦でも、敵軍を遮断する作戦でも、このような「目視無しの爆撃」で数多くの民間人が倒れていった。誤爆は前線の味方をも巻き込んだ。これがまさに^{裡里}駅と^{操車場}をはじめとする韓国の主要駅・操車場、都市と農村への「絨毯爆撃」神話の実体である。³⁾

²⁾ 空爆に関する特定の時期、特定の地域の部分統計は存在する。広報処統計局の集計した1950年6月25日～9月28日、ソウル市「空爆」による人命被害の統計がそうである。この統計により米空軍によるいわゆる「龍山爆撃」の被害規模を見積ることができる。

³⁾ 1950年7月11日、全羅北道の^{裡里}駅の爆撃時に、多くの地域住民が投下される爆弾を「ビ

が、味方を含めて友邦国民に対するこのような大量の爆撃と虐殺は本当に意図的なのだろうか？ 著者はこれに対して明確な答えを持っており、これを示すためにかなりの紙面を割いている。爆撃の目的と方法に関する議論、特に著者の精密爆撃に関する細心の検討は、このような文脈で行われる。結論から言えば、朝鮮戦争の初期、米空軍は民間人被害をできるだけ制限する精密爆撃を意図したが、爆撃の構造限界に起因する高い誤爆率で、それは事実上不可能であり、米空軍もこの事実をよく認識していた。米空軍が成功事例として誇る興南爆撃（1950.7.30.-8.3）のみが、民間被害を制限した、ほぼ唯一の例外であった。

戦術的であれ戦略的であれ、あるいは精密爆撃を意図したとしても、大量爆撃による民間人被害、特に民間人大量虐殺は戦争状況において発生した例外虐殺ではなく、構造的に胚胎された虐殺だった。そのような著者の主張は「爆撃の構造」とその限界を分析する部分に達すると、より一層光を放つ。

それによると、朝鮮戦争の初期、米空軍は、軍事目標だけに向けた精密爆撃政策を原則的に樹立したが、当時の戦略爆撃作戦と戦術航空作戦の制御システムの限界と航空機の機械的限界で、その原則は、事実上不可能であった。

具体的に論じれば、戦略爆撃の場合、純粋な軍事施設と民間の人口密集区域が互いに隣接している状況で、低高度の「肉眼爆撃（visual bombing）」ではない初歩的レベルの、レーダーに頼った雲上の「目視なしの爆撃（blind bombing）」は、大規模な民間人の犠牲を伴うしかなかった。何よりも当時の B-29 機の目標的中率は、機械的限界のためにとんでもないほど低かった。「幅 10m、高さ 200～300m の大規模な建物に『破壊爆弾』一つを的中させることができる確率は実質的にゼロに近く、少なくとも 100～200 発の大量爆撃を加えてはじめて 50～60%の的中率」（145～146 頁）という程度であった。このような状況で戦略—精密爆撃を意図したという話は、事実上、欺瞞に近い。

戦術航空作戦の場合でも、状況は大きく違わなかった。戦争初期、急激に劣勢となっている地上戦の状況で、米空軍は近接火力支援のために戦術航空制御グループと空中管制官「モスキート」が目標を誘導する戦術航空統制システムを設けた。このシステムは、初期いくつかの成功を収めたあと、まもなく限界を表した。まず、「ターゲットの位置を知らせることができる戦術航空制御グループやモスキートは絶対的に不足しており、無線通信状況も劣悪であり、急変する戦況の中で爆撃線（bombing line）が揺れ動き、高速飛行する戦闘爆撃機から昼間に移動する敵兵力と車両を発見するのは非常に難しいことであった（186 頁）」。特に戦術爆撃機 F-80 機（シューティングスター）の航続距離は非常に短く、目標地域に約 10～15 分程度滞在できたが、このように不安定な無線環境の戦術航空統制システムと燃料不足の圧迫感が加われば、隠れている軍事的標的の発見は事実上不可能に近かった（177 頁）。それでも任務は完遂せねばならないので、一方的に「敵兵力」、「偽装兵力」、「支援勢力」、「敵兵力集結地点」、「敵隠蔽不審地域」などとみなした標的に、持っている爆弾をすべて投下・排出し、機銃掃射を加えた。その標的はまさに民間人、特に「白い服を着た」避難民であり、一般的な村落や町であった。さらに味方（国連軍）に向けた誤爆事例も頻繁に発生した。

また、著者は、当時の機能主義的戦争マシーンとして育成された米空軍のパイロットに

「爆弾だろう」と思い、その状況を楽しんだという。当然誤爆の結果はひどかった。

目を向け、その戦時行動様式を分析する。それによると、空軍パイロットらは陸軍・海軍将校に比べて相対的に低学歴であり、基礎教育訓練の過程でも、人文学的・社会科学的知識が排除されたまま操縦技術と能力だけが要求された。その結果、戦闘爆撃機のパイロットは、本番でも制御システム上の「指示に機械的に従うか、または無感覚に任務区域内に爆弾を使い果たすことに自分の役割を限定した(191 頁)」。ここでさらに興味深いのは、「米国の戦争遂行のための一種の付属品として育成」された彼らも、実際には人間だったという点だ。著者はパイロットの様々なインタビュー結果を活用して、民間地域を無差別爆撃したことや、民間人、避難民への攻撃を合理化するための彼らの自己正当化方式を探求した。「任務ウイスキー」の話、自分の戦闘行為を一種の「神に仕える仕事」だと考えた牧師出身のパイロットであるディーン・ヘスの話、民間地域と民間人を事実上敵とみなす「言語札」など、パイロットが人間としてジェノサイド的爆撃を自ら正当化するための条件、「服従犯罪」の研究者ケルモンとハミルトン式に言えば、「権威化」（権限および指示への服従）、「日常化」（服従による爆撃行為を日常的、機械的であり、高度にプログラム化された作動へと切り替えること）、「非人間化」の過程を著者は分析している。

「非人間化」と関連して、著者は先に爆撃の対象への人種主義的偏見を議論したことがある。米空軍は、ヨーロッパでとは異なり、なぜ日本の戦略一地域爆撃政策に固守したか、そして、1948年独島爆撃事件を分析しながら「アジア人に向けた米軍の人種主義的偏見」に注目する。米軍が「日本の奴らを害虫だとみなしている」という南西太平洋地域連合総司令官の言葉は、ナチスがユダヤ人を見た見方そのものだった。第二次大戦終了の5年後、独島爆撃事件の2年後に発生した朝鮮戦争でアジア人への米軍の人種主義的偏見が依然として強かっただろうという著者の判断はさらに本格的に分析するべきだが、とりあえず説得力がありそうに思える。

これらの一連の分析と説明は、なぜ爆撃がジェノサイド的であるほかないかをよく示している。著者が分析した爆撃の構造自体がまさにジェノサイド・メカニズム、すなわちジェノサイドの制度的メカニズム、心理的メカニズム、イデオロギー的メカニズムである。⁴⁾

このように見ると、著者が「中国軍参戦と国連軍の敗退」（7 頁）以降、米空軍の爆撃が精密爆撃から無差別的な焦土化爆撃に移行したことを論じる部分はやや一面である。ワシントン当局と国連軍司令部、極東空軍と第5空軍の視点から見れば、そのような区別が理解できないわけではないが、ジェノサイド的爆撃の被害をすべて受けなければならなかった民間人の視覚に立ってみると、そのような時期区分は大きな意味がないからである。主要大都市と一部周辺の村々から 38 度線以北と敵占領地域全体に無差別的なナパーム弾爆撃が拡散された程度の差があるだけである。戦争期の3年にわたる爆撃で当初から住民にとって「後方」は、存在しなかった。マッカーサーの発言のように爆撃ですべてが破壊された「砂漠化された区域」（316 頁）で数多くの方が死んで行き、生き残っても地獄のような生活を生き延びねばならなかった。1950年末から継続的に検討された原爆投下の可能性と、1952年7月以降いわゆる「航空圧力戦略」が引き起こした大量破壊と民間人殺傷もこのような脈絡で分析されるべきである。

⁴⁾ 実際のジェノサイド理論家であり社会学者であるレオ・クーパーは、米国の広島・長崎原爆投下と連合軍のハンブルク、ドレスデン爆撃をジェノサイドと解釈すべきと主張している。Leo Kuper, 1981, *Genocide: Its political use in the twentieth century*, p. 46.

4. 2013年は、朝鮮戦争停戦60周年になる記念碑的な年である。しかし、朝鮮半島に核戦争の影が濃く縁取られた年でもあった。2013年4月、米国は、B-52とB-2爆撃機を動員し韓国の島々に模型の原子爆弾を投下した。北朝鮮の核の脅威への対応ということを主目的としたものであった。⁵⁾ 1951年9～10月にハドソン湾作戦に向けて沖縄から発進したB-29が、北朝鮮地域に模型の原子爆弾を投下した状況が繰り返されているのだ。

空爆でも原爆投下は最終的にすべてを消滅させる破壊方式である。それでも米国は、広島・長崎原爆投下を終戦を早めるためのものとして合理化し、日本の民間人の犠牲を仕方ないものだと正当化した。そして朝鮮戦争期の数多くのジェノサイド的爆撃と原爆投下計画もまた、北朝鮮と共産陣営の残虐行為のほうが悪辣なのだから悪くないというように合理化した。さらに公式の米空軍軍史において、朝鮮戦争期の爆撃はもっぱら韓国人の生命と自由を守るためのものであった(389頁)。

米空軍爆撃で多くの自国民の人命被害、物的被害が発生したことについて、韓国政府はどのように評価しているか？ 1951年3月、李承晩大統領の外信インタビューで表出しているように、当時の韓国政府の認識と評価は、米国と同様に韓国人の自由のための戦争遂行の過程で発生した、やむをえない崇高な犠牲だった。「強い反共主義と国家主義的な論理で、米空軍の対民間爆撃に対する国民の批判を事実上封鎖した」(389頁)。「そして、このような状況は昨今も大きく変わっていないようだ。2010年の「ニューライト」が主導した真実和解委員会は、最終的な総合報告書で、「朝鮮戦争当時、韓国は攻撃を受けた側であり、国家の存亡がかかった緊迫した時期であったことから、軍事的必要が民間人の保護規範の遵守よりも大きかった(391頁)」と判断した。米空軍による民間人の大量虐殺を「付随的被害」、「どうしようもない犠牲」と規定したのである。これだけで判断しても、60年の間に変わったことはほとんどないわけだ。そのため、逆説的に、この本の価値はさらに輝くのではないだろうか。

掲載誌『統一と平和』(5集2号・2013)

⁵⁾ ブルース・カミングス、「核の影に覆われた韓国の停戦システム」『創作と批評』第41巻4号(2013)、p.349。